

會



報

昭和18年5.6月

123

日本山岳會

山の字漫語

吉澤 一郎

(一)

中央アジアの登山や探検の書物を読んでみると色々の種族の間で使はれてゐる言葉や物の名前が出て来るが中でも特に吾々の興味を惹くのは「山」とか「川」とかいふ意味の言葉である。吾々の尊敬する故大島亮吉氏も嘗て、歐洲に於いて使用されてゐるモンとかマウントとかピツツやピツク等に就いて研究し之を蒐めて發表された事がある。私も氏の眞似をして今まで讀んで來た文献からチヨイと抜き書きして置いたものを漫談的に書き連ねて行つて見やうと思ふ。私が言語學者でも語源學者でもない事は諸士の既に御承知の事であるから以下が西歐文獻の單なる受け賣りである事は今更御斷りするまでもあるまい。

まづ支那からはじめて見やう。支那人は陸地の隆起して高いものを山といふ。之は吾國でも同じであるが彼等は同時に山脈の事も此のシャンで間に合せてゐるらしい。例へば北崑崙山脈の東端にある南山々脈中の祁連山であるが之は一つの山脈名(所謂リヒトホーフエン山脈に當る)であると同時に肅

州(酒泉)の略々南十八里許りにある同山脈中の最高峰たる一八八二七呎即ち五、七三八米の峰をも斯く呼んでゐるやうである。支那には山脈といふ言葉はないらしい。

それから山口といふ言葉がある。之は字引を見ると「山の登り口」となつてゐる。然し支那の地圖を見ると吾々なら峠と書くべき所へ此の文字を使用して安日爾拉克厦山口などと記してゐる。此の峠は南崑崙山脈の阿爾格山脈と巴顏喀喇山脈の間にあるが十九世紀の後半に印度の有名なバンディットたるキシエン・シング(クリシヌナ、測量局の記録にはA・Kとあり)が踏えた事で吾々に親しい。又山口の代りに嶺を使ふ事もある。例へば玄奘が西紀六三〇年頃に南

から北へ踏え、淺山と書いてゐる今のムス峠(天山々脈の騰格里汗山の直ぐ東にあり、一、四八〇呎)は穆札爾特嶺となつてゐる。元來嶺は山頂に道路を通じ得べき部分の謂で日本語の嶺とは意味が異なる。峠といふ字は日本製のものらしい。尙蒙古語のダワーン(達坂)も中央アジアでは至る所で

使はれてゐるが之も峠の意である。大菩薩嶺といふと大菩薩峠の西にある山頂の事と思ふが支那で山の絶頂を意味する言葉には巔頭、巔表、巔などがあつた。事の前後の事情といふ意味の巔末は支那語の字引にもある。蔣介石の落ち延び先の候補地になつてゐる西康省の打箭爐南方にある貢嘎山(ミニヤ・ゴンカー)山群中に一米峯、二米

峯などといふ水峰があるが此の「峯」とは山の直立して鋭き所をいふらしい。尙山頂は日本語では山の頂であるが支那語ではシャン・ティエンで粗紙の一種となつてしまふ。岩は巖の俗字であるが之は岩石の岩ではなく山の高峻なるもの、同様にして岳は嶽の俗字で高くして尊き山を意味する。又支那語の峻は巖の事で峻は大なる阜丘、塚又は峻しき事をいふ。前出の崑崙は崑山とも云ひ崑崙とも書く。佛印南方海上の島にも此の名のあり、マライ人の事を崑崙奴とも云つた。

支那は支那でも盛世才が省長をやつてゐる新疆省となるとソ聯の勢力が大部幅を利かしてゐるやに聞いてゐるが此處には蒙古系とトルコ系の地名が澤山にある。天山東部の博格多烏拉(六、五〇〇米)のウラは支那の山と同様山であり山脈の意味にもなる。青海

省の青海(庫々泊)と大通河の間に北崑崙系の大通山脈といふのがあるが之は蒙古人(唐古特族)は通烏拉と呼んでゐてク北の山といふ意味である。

博格多山の南に吐魯番といふ町があり、此處は中央アジアの眞中だといふのに海面下約三百米の低地があるといふので有名であるがその又南に天山の支脈とも見るべき庫魯克塔格といふのがある。之はトルコ系の名稱でターゲ(Tağ)が例によつて山又は山脈である。之を獨逸語と間違へてタハなどゝ發音してゐる勇者が時々ゐるやうであるが、バミールの東邊に聳えるムスターグ・アータなどをムスタハ・アタと呼んだりしたら山だか何だかわからなくなつてしまふ。

大部西の方へ來たので今度はバミール高地で山に關係ある言葉

目次

- ・山の字漫語(一)吉澤 一郎……一
- ・登山年譜資料管見(四)……三
- ・三月の東大谷……四
- ・陸軍美術協會展覽會を觀て感在矣……五
- ・會員通信……六
- ・會員の聲……七
- ・會員總會其他……九

を採して見やう。それにはまづ此のバーミールから解釋する必要がある。之を惹嶺と書かせるのは少し無理であるが此の由來は足立喜六氏の法顯傳によると西藏語(ウ)の砂山がツンターグとなり惹嶺になつたものとある。バーミール(帕米爾)それ自身は印度の副王兼總督であつたカーズン卿の研究によるとベルシヤ系の言葉でバイ・ミール即ち「山々の麓」といふ事になるらしい。ミールを山として使つてゐる例はナンガ・パールバツトの地方名たるデオ・ミール、ヒンヅ・クシユ山脈中の高峰テリチ・ミール、ベシヤール・ミール地方のミール・カーラン(大山)等に見られる。

ムスターグ・アータ山脈の西側にサリコル山脈といふソ聯と新疆の國境を爲す山脈があるが之が語源には二様の説がある。サリク・コル即ち「黄谷」が一つ、今一つはシール・イ・コル即ち「谷の頭」となすものである。

ソ聯の最高峰ビツク・スターリ(七、四九五米)を含むトラン・ス・アライのピーター大王山脈の東部にペリョク・タウといふのがあるが之は峰雪山から轉訛して來たものらしい。ビールを山の意に使つてゐる例はカシユミールにビール・パンジャール(聖人の山)

といふのがあり、インダスのナンガ・パールバツト山麓にハットー・カサス山脈の方で大部が馴染みの答(コシユタン・タウ、ドウチ・タウ等)と思ふがバーミール附近にも深山ある。喀什噶爾西方の瑪爾勘河の源頭にマルカーン・タウあり、同北西にはコク・タウがある。之も支那の山式に使はれてゐるらしい。

少し離れるがイランの南西部に克蘭といふ河があるさうであるが之はク・ラン即ち「斑色の山」から出る河といふ意味だといふ。ク・ランに似たク・ミール山語で山を意味し、インダス下流右岸にあるク・イ・スライマーンは「ソロモン山」といふ事である。同様にク・イ・スターンは「山國」の意。尙ク・イ・スターンとはいふかも知れないが新疆省和闐の南にある北崑崙の最高峰ムスターグ峰(E 61, 二、三、八九〇呎)の北西にカラ・キールといふ峰があるが之は「黒い峰」といふ意味である。

之からそろ／＼カラコルムからヒマラヤの方へ移つて行く事にしやう。カラコルムの西部にあるコズ・サール(二一、九〇七呎)、デイス・テギール・サール(二五、八六八呎)等のサールは矢張り「山の意」

である。K 2の本名とか別名とか云つて多くの旅行者や探検家や登山家が印度測量局に提案した名稱の中でデブサンとかダブサンとかいふのは西藏語で「清淨な記し」即ち「輝しい崇峻な幽巖とか妖怪」といふやうな意味であるが今は高原の名稱に使はれてゐる。又、ランバ・バハールといふのはヒンドスターニ語で「長い山」といふ意。チヨゴ・リといふのはバルタイ系(西藏語の方)で「大山」。バハールの方はクマウン、ガルワール、カーンラ、カシユミール方面で一般に使用され、ナンダ・デヴィ・バハールなどいふ事もあるらしい。パンジャブにはバハール・ブル即ち「山町」といふ町もある。

K 2の衛星峰として以前ステアケイスとして知られてゐたスキヤン・カンリー(Skyang Kanri)と書きSを發音する)は意味は「野生の驢馬の山」。カンリーは嚴格に云へば「氷の山」である。カンリーのつく山は西藏に多い。ヘディンが発見したインダスの水源シンギー・カムバ河の右岸には一、八七四年にナイン・シグが発見したアリン・ガンリ(二四、〇〇〇呎)があり、藏布河の中流北岸には一、九〇四年にH・ウツドが測量したルムホ・ガンリ

(二、三、一五〇呎)がある。新しい所ではロングスタッフの命名したテラム・カンリー(シアチエン米河に面す)など。

ヒマラヤの部に入る前にこのヒマラヤの發音に就いて一應述べて置くがバラツクなどはヒマラーヤと讀ませてゐる。然し印度で生れたヤング・ヘズバンドなどは寧ろヒマラーヤと普通に大人しく大したアクセントなしに流れるやうなリズムミツな發音で讀んだ方がいゝと書してゐる。(Everest: The Challenge, by Sir Francis Younghusband, 1936)

尙此處では山名考をやつてゐるのではないから山といふ字の入つてない名稱は有名なものでもなるべく抜かして行く考へである點豫め御諒承願ひして置く。

まづナンガ・パールバツト、之は「裸の山」といふ意であるがパールバツトはサンスクリット語の山の意であるバルヴァタ(女神ドウルガの別名でもある)から轉訛したもの。クマウンにハツテイ・パールバツトといふのがあるが之は「象ヶ岳」の意、同じくガウリ・パールバツトといふのは馬ヶ岳。ナンガの南東にドラース河の流域でデオサイ平原といふのがある。之をバルタイ族はビアルグアと呼んでゐるがグアは「草」、ビアルは「山」で結局「草山」となる。

次にサトレジ河の支流スピテイ河の北岸にシラといふ二、三、〇五〇呎の山があるが、之は七千米級では最初に登られた山、而も登つた者が印度測量局で備つた土地の測量助手達であつた事に特異性がある。そして意味はサンスクリット系のシラで矢張り「山」。

ガンジスの支流バーギーラツテイ河の上流にあるスリ・カーンタは尖峰、尖針の義、同じくクマウンのニル(ニラ)・カーンタは「青い山」。スリ・カーンタと同じ山群に入るケダールナート(二、七七〇呎)のケダールは涅槃神の姓の一つたるケダラ或ひはキダラの轉訛で「野原」或ひは「山」を意味し、ナートは「神」であるから「山の神」となるらしい。それから直ぐ東のバドリーナートの別名をチャウカーンバといふが、之は山が四つ柱の様に立つてゐるといふので「四つの柱」といふ意味である。

次はずつと離れてカリー・ガンダク河の上流でアンナ・ブルナと對するダウラギーリ(二、七九五呎)・之は「白山」といふ意。序であるから附加へるが、ナンダ・デヴィの北西に當るダウリ・ガンガは「白河」、アビー峰の西に峡谷をなして流れるカリー・ガンガは「黒河」の義である。ギーリが出たので南部印度にニルギーリ即ち「青い山」といふ山群のある事も記して置く。ナンダデヴィの西にあるドナグリーも之に屬すると思ふがドナグリーの意味は殘念乍らまだ知らない。(以下次號)



登山年譜資料管見 (四)

○明治四十年(皇紀二五六七年、西曆一九〇七年) 日本登山年譜資料(其の三)

沼井鐵太郎

劍岳第二回登山

七月下旬。柴崎芳太郎、測夫木山竹吉、人夫岩本。前項及前々項諸文獻。——第二回の登頂で四等三角點建標を建設する事に決定した。要再調。

劍岳建標測量

(前項に繼ぐ、建標何日、測量何日、發表何日)。柴崎芳太郎一行。山と溪谷社編「登山講座」第二卷(昭和一七、九、三〇)一四四陸地測量部「著名高山火山三角測量史料」——第二回登山後建設觀測を了して之が標高二九八米を得た。要再調。

測量以前の試登其他

測量隊の登山によつて人跡未到といはれた劍岳の絶巔にも嘗て信仰の開路登山の行はれた事が判つた。されば「芦崎寺にては、劍山の道案内を知る者有之候へ共秘傳として、漫に人に傳へず、極めて高價の案内料を食りて、稀に道案内をなせしことあるのみなりしが、今回の事にて、全く其株を奪はれたる事になりしとか申候(前々々項文獻中の一節)とあるのも

ふ記事で推察出来る。要再調。

立山・針木峠

(何)月。青木忠次郎(本會々員)山岳二の三(明治四〇、一一)一七四。要調。

祖父岳

三等三角點(點名祖父岳)撰點建標觀測。青木一郎。山と溪谷社編「登山講座」第二卷(昭和一七、九)一四六。——二六六九米八二の標高を得。

針木岳

三等三角點(點名野口)撰點建標は柴崎芳太郎、觀測は青木一郎前項文獻一四六頁。——二八二〇米六〇の標高を得。

(飛驒山地中部)

針木峠・黒部川東澤・烏帽子岳・高瀬川・東澤乗越・中房

八月。井野英一、笹松賢(二高生、高松誠(五高生)、成川武男(四高生)、案内者勝野謙一、細川直吉、人夫伊藤某、新井要吉、傳刀林藏。山岳三の一(明治四一、三)七七—九〇井野英一「黒部川及高瀬川旅行記」。——八月四日上野驛發—明科—大町泊—花見小屋泊—針木峠—平小屋泊(勝野は之より歸る)——九日東澤野營—水晶小屋野營—東澤—五郎岳—三ッ岳—烏帽子岳—濁澤野營—高瀬川—東澤野營—乗越—中房泊。

中房・東澤乗越・高瀬川・烏帽子岳・鶯羽岳

七月—八月。志村島嶺、案内者横澤類藏、人夫山田國衛、同今朝市。山岳三の二(明治四一、六)——一九日本アルプス縦走記「長野—明科—中房泊—七、二八、中房川源流—西臺原—乗越峠(東澤乗越か)——東澤—高瀬川傳兵衛小舎泊(一三七五米)——濁澤泊—烏帽子岳—五郎岳—シノハチ岳野營—赤岩—鶯羽岳—之より往路を戻る。

高瀬川

七—八月。大林區署員一行。山岳同右文獻。——前項紀行に大林區署員一行傳兵衛小舎に宿泊せる旨を記す。行程未詳。要再調。

(飛驒山地南部)

常念山脈

前項參照。七月下旬。常念岳。辻村太郎本會々員。山岳二の三(明治四〇、一一)一七三。——中房より。

常念山脈・槍ヶ岳

八月中旬。燕岳—槍ヶ岳。三枝威之介(本會々員)。山岳同右—一七六。

八月下旬。大天井岳—十九日二ノ俣—槍(複谷一行と同行)——慶應生徒。山岳三の三(明治四一、一〇)四二頁。要再調。

槍ヶ岳

槍ヶ岳三等三角點(點名槍ヶ岳)撰點建標觀測。吉野半平。山と溪谷社編「登山講座」第二卷(昭和

一七、九)一四五。——二〇〇三米一一の標高を得たといふのであるがいづれの地點なるや未調。後記複谷の紀行には「先年陸測三角標をたてた」とあり。要再調。

八月中旬。辻本満丸。山岳二の三(明治四〇、一一)一四六—一四七「槍ヶ岳の標高」。——乗鞍登山後—蒲田—上高地—十一日槍登山。辻本アネロイドにて槍絶頂觀測標高三一五〇米(一〇三九五尺)を得、從來の高頭(凡二七〇〇米)日本山論(三五三—一)米、ウエストン(一〇三〇〇呎)の數値と比較した。

八月中旬。榎谷徹藏。吉田某(有明村)・慶應生、案内者横澤類藏外一名。山岳三の二(明治四一、一)一七二、同三の三(明治四一、三)三九—四八榎谷某「槍ヶ岳の巔」。

上高地

七月下旬。大下藤次郎、案内者岡田作次(烏々)。山岳二の三(明治四〇、一一)一三九—一四二口繪總高山殘雪寫生の旅行談及び所感。——烏々—德本峠—上高地—十八日穂高、霞澤岳寫生。

燒岳

十二月下旬。船津警察署柴田巡查部長、船津小林區署田頃家保護區官舎在某技手、人夫四名。山岳三の二(明治四一、三)一六三—一六四。——二十日中尾より雪中登山(硫黄岳と名あり)、目的は噴火

後の踏査登山、腕部迄の熊皮製手套、手拭様のものを以て頸部頭部を包み、六尺以上の杖及び三丈餘

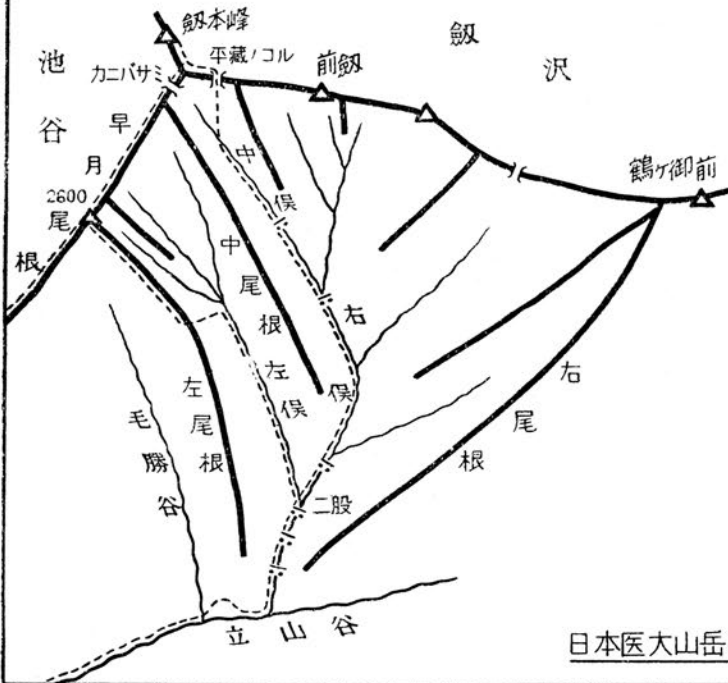
の麻縄(凍傷者運搬の爲)を携ふ。雪量麓は五尺位、頂は二尺餘と云。(未完)



三月の東大谷

日本醫大山岳部

釧岳東大谷概念圖



日本医大山岳部

我々は毎夏釧澤に合宿して居るのであるが、今まで餘りやられて居ない釧の西面の東大谷をやつて見たいと考へたので去年の七月にはその偵察の意味で早月尾根と池の谷から入つて見た。

そして九月に第一回登攀を試みたのであるが天候不良の爲め見事撃退され、立山谷、白萩谷をつめただけで終つて仕舞つた。そしてこの三月第二回を試みて成功したので簡単に報告しようと思ふ。

東大谷は御存知の通り、釧本峰より鶴ヶ御前に至る稜線から一氣に立山谷に向つて落ち込んで居る諸谷の總稱で、立山谷との出合から登ると鶴ヶ御前からの尾根(右尾根)と早月尾根二六〇〇からの尾根(左尾根)とに抱かれて居る。出合から少し登ると三段の瀧にはまれ無雪期には殆ど登攀不可能と稱せられて居る。嘗て昭和五年頃の夏吉澤一郎氏一行が左俣を始めて登られ、積雪期には昭和十年春立教の山本、榎本兩氏が右俣の中俣をつめて本峰に出て居る。又富山高校は數年來この谷を狙つて右俣より中尾根に取付き、チヨンラビークに達した報告がある。

我々は三月の二十日全員十四名他に苔餅の光次郎、文蔵、豊太郎と共にバンベ島に入り、それから一方早月尾根一八〇〇の地にテント建設作業を進めると共に、東大谷偵察に専念した。三回の下よりの偵察と一回の早月尾根と釧本峰からの偵察等の情報を綜合して左尾根と、中俣から平蔵の谷に達する二つのルートを選定した。

左尾根に目を着けたのは、我々の最終目的たる中尾根登攀の偵察と、中俣班及び早月よりサボトとの連絡、左俣上部の偵察等を兼ねて登つて見ようとしたのである。早月からは直ぐ眼の前に氷の壁の大きな瘤がある爲め、それより先の見通しがつかず、又下からは左俣側に雪底の出で居る事は分つても尾根の上部の様子は全くわからなかつたからである。

三月三十一日満天に星を頂いて午前一時バンベ島を出た。雪の調子良く東大谷出合四時半——五時二俣五時二十分——三十分、此處で中俣班と左俣班に分れた。中俣班の方を最初に述べる。二俣から廣い緩斜面で正面から鶴ヶ御前からの澤が落ちて居る。之をつめて鶴ヶ御前に至るルートは技術的には容易いと思へた。右俣はこの邊で少し左に曲つて居る。痛々しいデブリを越えて行くと草付の岩峰が正面に聳え右手に小澤が一本

入つて居る。此處で谷は大きく左へ曲つてそれからゆるやかな曲折を経て右に折れて居る。やがて右俣最大の谷が右手から入つて居る。この谷の軍釧よりの岩場は相當興味があるだらう。我々は眞直ぐ中俣に登る。新雪表層雪崩のデブリが果々と續く。正面に見えた岩峰の下を大きく左へ曲つて進んで行く内容は次第に狹まり兩岸は切立つた岩壁に變つた。絶えず落下する氷片と落石を避ける爲め、登る時はビツチを上げ休息する時は素早く岩角の陰に隠れた。出来るだけ早く登り切らぬと谷に日が當つて恐しい事に成りさうに思へたので急いだ。中尾根に通ずる最後のルンゼを見送つて少し登ると中俣のカニバサミへ通ずるルンゼは全く雪で被はれて見通される。我々は右手眞上の平蔵の谷へ通ずる岩場の基部に着いたのが八時であつた。こゝで始めてゆつくりと休む。先づ斜に走るバンドを目掛けて岩場を登る。左へトラパスして直登第二のテラスに着く。浮石が多く岩がゆるんで厄介である。今登つて来た谷へ相當石を落して強引に登る。岩場の傾斜が弱くなつたなと思つたらヒョッコリ平蔵の小屋の直ぐ手前に出て仕舞つた。釧頂上で早月尾根のパーティーと一緒にになり、早月尾根を一散に下

る。

左俣班は六時半には左俣の二俣まで着く。左尾根から二本澤が落ち込んで居る。その左側の澤を登り途中から左のリツヂに取付く。

ステツプを切る氷の破片がザツザツと降りかゝる。大きく澤をトラパスして左の稜線に取り着いたが之は又全く切り立つた様なリツヂである。この様にして澤に取付いてから左尾根の稜線まで一時間半かゝつた。稜線は左俣側に物凄く雪庇が出て居り、滑せた尾根は毛勝谷と左俣に一氣に落ち込んで居る。雪庇を乗越した時早月尾根のサボートと連絡が取れ、ヤツホを交す。之から主として毛勝谷側を進む。一つの大きな痛の登攀には全く悩まされた。この稜線から左俣を偵察すると、澤は我々が分れて来た二俣から更に二つに分れ都合四つになつて居る。左俣上部も横から見ると天程でもない様に思はれた。

この痛を乗越すと後は樂で早月二六〇〇の痛に達する。中俣班とは遂に連絡が取れなかつたが、我々が二六〇〇に達した時、銀本峰より中俣班二名と早月尾根班三名が元氣良く下つて来て全員大いに氣焰が上つた。

そして皆一八〇〇米のテントに一晚を明し、テント撤収、パンバ島へと下つたのである。

後片付けの幾人かを残して、立山谷を至堂へ乗越し、天狗に宿り一氣に彌陀ヶ原を飛ばして歸つた。(戸塚武彦)

陸軍美術協會展覽會を観て感在矣

西岡 一雄

陸軍美術展覽會が心齋橋大丸樓上に開かれてゐたので自分は一見すべく杖を曳いた。

大作小力作駄作とりどり仲々に見應へがあつた。入場口に脱帽と貼紙がしてあるので自分は勝浦敬虔な気持ちで一々の畫を見て廻らなければならなかつた。畫面に表示されてゐる我勇士の氣魄健闘苦慮辛苦さういふものに對しては眞實に頭の下る思ひがする。我勇士が進撃の途上水溜に伏せて水を飲む圖が二つもある。二つとも一滴の水をいとしみ渴を醫してゐる圖である。疲れて渴いた喉が、如何に水を切實に欲するかが登山家の人にはよく體驗するところである。此繪を見て戦争ではな

いが曾て飢渴に悩んだ往時の登山を回想したりする。しかし、昨日迄は若女のおしりや肉附きのよい裸婦計りを描いてゐたこれらの人達が瞬間に轉向して眞剣ひたむきその物である戦争畫に這入つていつたのであるから、ピンからキリ迄傑作戦争畫を期待するのはこちらが無理なことは承知してゐる。爰當分の間は頭の下るやうな迫力と氣魄に満ちた

繪はのぞめないにしても、やがては心底から湧き上りもれ上つた傑作が、この數十人の戦争畫家の中から二三人は必ず出てくるらしい期待がある。今自分はその畫の一つ一つ又その畫家の一人一人について論じやうとするものでない。又そんなことは自分の任でもなく且よくするところでもないが、藤田嗣治にしろ、熊岡にしろ、中村研一にしろ、女の横顔や、ある風景や一木一草の微と雖も丹念に眞剣にボツ／＼と研究しつゝ描いた方がもつと／＼よいものが出来たやうに思はれる。それが今迄の此人達であつて、急にそつといふ人達が戦争畫家になり切らうと思つてもなりやうがない。腰のフラ／＼した兵隊さんを描いたり、變な聲を張りあげて純日本軍歌や軍歌を唄ふ

とかいふ男が慰問にかこつけて變な愛國者顔をしていても、根がやうな男のことゝ一向に自分等は感心しないのである。マア國家がもつと若い畫家をよく保護して一生懸命に根からの戦争畫家に仕立てあげてこそ立派なものが生れてくると自分は考へてゐる。

繪の巧拙は第二義として、自分は此等數多くの戦争畫の中から、自分が専攻する軍の裝備や兵器につき、吾等山岳人にとり、どれだけの交渉があるか、さうした物を眼目して見且つ稽へたかつたのであつた。それは曾て二度も三度も「軍と山岳人との提携」につき微力ながら小論文を書いた自分は、これらの戦争畫の中にどの程度に又どういふ風にとり入れられてゐるかが知れたかつたのであつた。

ところが、關東軍の出品畫の中に「北守」といふのと、「雪原を征く」と「野營の夕べ」といふ三つが劈頭目に入つた。三つ共足の裝備は略同一である。即ち何かダブ／＼した毛でつくつたやうに思はれる長ゲートルをはいてゐる。軍靴は不明であつたが、この長ゲートルはこの寒い雪の原に於ては甚だ効果的であると感心した。「野營の夕べ」によると吾等が平常内地に於てもよく見なれてゐると同じ形の外套を兵士は被つてゐる。そして手袋の上に更に毛皮で作つたと覺しき手袋を重ねてゐることはその畫中の一人が、その一手を紐に、手にはめずに首からブラ下げてゐることによりよく判斷される。そして外套の頭巾の裏にも何かの毛皮が張つてゐる。この二つの材料は不明であるが、既に久しき以前

より、山岳家の嚴冬裝備と全然同一であることが心強い。遙かに蒙古住民のもつ包が見へる。我陸軍がいつの間にかういふ最新式にして適切なものを採用したのか、その賢明と努力に對しては誠に敬服の念に堪えない。これでこそ我北の守りは確乎として十分であると實に吾意を強うしたる次第であつた。「北守」では異なる外套を着用してゐる。白色で外套といはんよりは、むしろマンテルである。畫を熟視すると、朔風のためにこのマンテルは軽く皺つてゐる。しかるに一方「雪原を征く」の畫題によると、兵隊はマンテルともつかず外套ともつかざるものを羽織つて、その上に銃を肩から斜に後ろにかけてスキーをはいてゐる。以上三つの繪は三つ共外套がちがつてゐる。その一々の用法は畫だけでは判斷がつかない。或は兵種によつてそれ／＼着用に異にするかのやうにも想像されるのである。しかし私の考へでは、この最後の物即ちマンテルとも外套ともつかざるマンテルから手の出たやうな外套こそ、昔より登山家に愛用されたもので、既に大正十年頃から私が或はスウイスから或は奥國から舶載したものであつて、此の外套は脊中に當る中央部から裾へかけて大きな襷が一本通つてゐて、

ふくらんだ大きなルックザツクを撥つた上から羽織つても相當量伸縮がきくので大變便利なものであつた。陸軍がかういふものに迄目をつけていち早く採擇された装備眼に感銘し、吾等が軍への信頼の念はいや高まる計りであつた。包にしる、外套にしる、手袋にしる、頭巾にしる、長ゲートルにしる、何れも皆今日最新鋭を誇る登山家のそれと殆んど同一であることに我等は注意すべきである。此際百尺竿頭一方を進めてスキーに就いても抱懐せる愚見を述べてみたが、現在の陸軍スキーに關して未だその詳細を熟知せぬ故これは又の場合にしたい。

向井潤吉氏筆「肉薄攻撃」は場中での大作であつた。この繪畫は斷崖下に膠着せる吾勇敢なる工兵隊が奮然として熾烈なる敵の銃砲火を冒して將に崖上にある敵陣地に跳り込まんとする圖である。或者は銃剣で突込まんとしてゐる。或者は岩の陰に身を隠しながら攀ち登らんとしてゐる、或者は岩にくらいいついてゐる。爰には登山家の使用するやうなロープは認められない。何の登攀具も注意したが描いてなかつた。しかし仄聞するところによると、我陸軍ではかゝる登攀具迄も既に研究されてゐるといふ。勿論軍としては、軍の立

場上に即應してのみの研究であるから、ビトン一本、ロープの一筋も吾々登山家のものとはちがふのは知れ切つてゐるが、とりあへず、既にかゝる物迄が又我陸軍がよくこなして採用してゐることに吾等喜ばる。城壁を攀ぶに繩梯子のあることは既に映畫でみた。岩梯子を踏み越え、さがしき斷崖を上下するにロープのあることは無論である。敵を前にして悠々岩登りの秘術を盡すといふことは困難であるから、この登攀技術も巧緻精細よりはむしろ拙速を專一としたが故に一工夫あるべきである。そのためには繩梯子、ロープ、ビトンも尙竿竹をも必要とした。折疊式スキーがある部隊には斷然重視されてよいが如く、ビツケルをも軍隊が使用するとせば、その木柄に長短自在の工夫をも凝らすべきであらう。

「北邊の幕告」も亦示唆に富む構圖であつた。天井にひける一筋の綱から吊る二つの洋燈は懐しい。これは軍と山岳家と何れが先きに採擇使用したかは判らないが、私は後者に團扇を挙げたい。營舎内では昔から陸軍にあつたか否かは別として幕舎内では慥かに吾等の方が軍に一步を先んじたかのやうに思ふ。ついでながら鐵山用ヘツド電燈のやうなものは、かういふと一笑されるかも知れぬが、軍は採用してよいと思ふ、誰れ憚らぬスキー行軍とか、洞穴内搜索とか暗夜の渡河とかには十二分に必需品だと稽へるからいふのである。この圖は深夜の包の内部を寫したものでないから、未だ一人の兵士と雖も眠りに就いてをらぬが故にその寢具は想像の外はないが、恐らくそれは毛布の類でないかと憶測される。若し登山家が平素使つてゐる寢袋の類であるとすれば、吾等の不明は慚愧に堪へぬが、包や天幕中での簡便な寢具としては、携帶にも至便にして暖いこの寢袋の使用を希望する。尤も登山家と全然同一の物であるよりは、むしろ閉閉自在、開けば約二間程のシートとなる兼用的寢袋を推薦したいのである。

登山家の裝備を、それがいくらか合理的であり又至便としても、その儘それを軍隊に押し付ける不合理は百も承知であるが、私は我陸軍が一層登山家の如きものに手を加へて軍の威儀を損せぬ限りこれが採用をも希望するものである。殊に我衛生隊、軍醫隊の人達の間にて、寢袋とルックザツクとは極めて便利であると思ふ。今日皆が使つてゐるやうな三ツポケットの徒らに繁雜にして定りきつたものは度外視してよい。簡素でしか

も實用的であり且多少いかついところを加へるの外、胸部にも、古い登山家が愛用したときく、ズダルススキーポケットを二ヶ併用するか、一個を大きく禪僧の袋の如く負紐に結びつけるか、多少の工夫により清新にして堅實なものを作りたい。人は皆ルックザツクといふ言葉上の觀念から、すぐ尋常一様の登山囊を想像するに止るが、その登山囊から變轉潤達したる物を工夫すればよい。

この展覽會に描れてゐた用具裝備の中、吾等登山家に關係あるものは以上の如くに僅少であつたから、筆は他に廻らぬが、再三くり返して今日迄にいつた如く、軍と山岳家は實にかくの如き少數なものの中にも共通點が誠に多いのである。さればこそ、野球庭球は今日の御時世に不必要としてつぶされたが、登山は行軍スキーと共に現存したのである。行軍して直接御役に立つのは立派な行爲として賞讃されようが、一步その好むところに従つて深く考へよく工夫して、軍への裝備用具（一括して兵器）の研究は他にもより重要な學者達の協力があるとしても、又登山家は其の登山のせまき範圍よりしてその體驗を生かして、よしと信ずるものを循つて貢獻せねばならぬと思ふ。陸軍美術展覽會を見て一言同志の奮起を促す。

(十八年五月九日)

信通員會

ビルマ戦線にて

廣瀬 甚吾

拜啓。懐しい會報有難う存じます。皆様お變りなく御健闘の事と存じます。大東亞戰建設も着々進行しております。小生相變らず元氣であります。

内地は櫻のツボミ、山は新芽の頃でせうがこちらは既に酷暑が來まして何物も灼きつくす様な日光です。然しジャングル内で惡疫も何もそので皆張切つております。

ビルマの何はヒマラヤの雪解け水です。ビルマの山はヒマラヤに通ずると云ひませうか、ヒマラヤの雪を見る夢は現となるやも知れません。いやヒマラヤを呑むの概を示しております。皆健在ですから御安心下さい。

内地は何かと變ることです。玄米食になつた様です。玄米食は結構です。こちらは白米は有り餘る程あります。何と一升六錢です。然し美味くありません。之は作る人の心構へが違ふからでせう。つくづく祖國の米の有難さを感じます。ジャングル内で食ひ氣だけなので遂に食ふ話になり失禮しました。では又おたよりします。

遙かに祖國の皆様御健闘をお祈りします。敬具

(十八年五月到着)



會員の聲

塚本 繁松

—聴く方の立場の一人として—

「會員の聲」といふのは十六年の春頃冠松次郎氏の提唱によつて會報に設けられた一つの欄である。この欄を設ける時、會報の内容はどれもこれも皆會員の聲ではないかと交ぜ返した者もあつた。特別の聲なら「會員の大聲」とでもしたらどうだと半疊を入れる者もあつたりしたが、とにかく會員の會へ對しての希望、要求といつたものをのせる欄として當時の編輯者望月達夫君が設けたものである。その欄を作る時、欄を作つても會員の寄稿が續かねば結局その欄も續かないのだと望月君は書いてゐる。ところがその反響は忽ちあつて、先づ「山岳」が餘りむつかし

過ぎるから、もつと我等の身近かに感ずる記事をのせてくれと注文が出た。近頃の「山岳」はまるで山岳學の學位論文みたいだといつたやうな批難である。それに對して、「山岳」には「山岳」の特色があるものであり、それを一般雜誌並にする事は希望しないといふ寄稿もつた。

私なども「山岳」は少し難かし過ぎると思つてゐた一人であるがさうかと言つて一般雜誌並にしたいと思つてゐない。右の要望に對して「山岳」の編輯者はどうゆう考を持つたかは知らないが、私も役員の方席を汚す一人として、又事務所を預つてゐる立場からなるべくさうした要望に沿ふように努力して來てゐる積りであり、その意味で進んで拙文を「山岳」誌上にのせてもらつたりして來た。まだ役員會の議題に「山岳」を今少しやさしくする件」なんていふのが提案された事がなく、役員達の考はどんなものか分らないが、今度小島名譽會員が「山岳」がむつかし過ぎるといふ話もあるやうだからと言つて「人力車上の觀山旅行」といふ一文を「山岳」に下さつた。有難いと思つた。「山岳」の内容について矢張りさうした關心を持つてゐて下さつた事が有難かつたのである。「山岳」は色々の影

響で問題になつてから今度出るの
でやつと三冊目だが、難かし過ぎ
るといふ方向にも一般雜誌向にも
進んでゐないと思つてゐる。

× ×

次いで問題になつたのは、其冬
マチガ澤で起つた雪崩遭難に對し
て嚴正批判の要望であつた。この
問題については三回にわたつて會
員間に論戰的のものが續けられ、
最後に、山岳會も此際一言あつて
然るべしとあつたので、當時編輯
の責任者であつた私は「編輯者曰
く、この問題については各方面の
意見を求め責任ある結末をつけた
い考でゐます」と書かざるを得な
い立場になつたのであつた。絶對
的にさうゆう立場に立たされた譯
ではないが、其處迄來てはさうす
る責任があると思つたのである。

公的の責任である。其處で嚴正な
檢討をしてくれるやうな人を物色
したのである。早大山岳部の承認を
得たので御願ひする事とし、先づ
遭難事件の責任の立場にある當事
者に對して會報の論戰状況を示し
て、事件の顛末の説明を要望した
のである。その承諾を得る事は出
來たが、たま／＼「會員の聲」中
に使用された字句に幾分不用意な
言葉があつたのでそれを人身攻撃
なりと當事者が言ひ出し、かつ匿
名であるのは卑怯であるから執筆

者の氏名を明らかにせよと迫られ
た。會報編輯者としては眞摯な會
員の聲として會報にのせたもので
あり、人身攻撃などとはいささか
も思つてゐなかつたのだから此要
求に應ずる事は拒絶せざるを得な
かつた。しかしこの事は決して責
任を回避するといふ意味ではなかつたのである。

かくて漸く當事者の説明を聴取
する事となつたのであるが、この
席には早大の外、慶大の山岳部員、
畿内信彦君にも出席してもらつた。
此の席では自然色々意見も出たが、
批判會ではないのだから決定的の
意見は發表されなかつた。たゞ事
情を聞いた後の感想は二三述べら
れた。その中の一つに、雪崩發生
の當日は降雪が續き、新雪が相當
多く積つたが、夕刻になつても降
雪はやまず、雪崩の危険が刻々に
迫つて來たと思はれたので、折柄
スキー練習中の人々に、安全と思
はれる雪洞への引揚げを命じたとい
ふ當事者の説明に對して、そのや
うな日に雪崩の通過する道筋でス
キーの練習を行はせるといふ事そ
の事が、事件とは直接關係がない
としても何かそこに遠因があるが
あるのではないかと思はれる。少
なく共山に對して抱いてゐる我々
の態度と當事者の山の見方とに幾
らか開きがあるやうに思はれると

の感想があつた。

マチガ澤は一見しては甚だ雪崩
の危険性の多い谷のやうに見える
が、此時の當事者の説明によれば
數年にわたる實地踏査の結果雪崩
の出場所は明らかとなり、それは
注意すれば避ける事が出来るので
安全にやつてのける自信があつた
との事である。それが思ひがけぬ
例外的な雪崩の通過の爲に慘事が
起つたのださうである。雪崩とい
ふものは數十年の年輪のある森林
をさへ薙ぎ倒して通過する事ある
事は、山へ登る人なら大抵は知
つてゐよう。さうした例外的な雪
崩の爲に起きた慘事ならば誠に不
運といふより外なかつたであらう。
しかしこの事件の現場は決してそ
れ程の例外的な所ではなかつたや
うで、只當事者の數年の經驗によ
る安全地帯に過ぎなかつた事は殘
酷な現實によつて證明されたので
ある。この事は各山を歩く程の人
は大いに戒心せなければならぬ事
とつく／＼感ぜられた。自分はこ
の谷に精通してゐるから大丈夫だ
といふ錯覺が往々にして我々に起
き勝つてゐるが、それが慘事を引
起す原因とならぬとはどうして言
へよう。この場合就々たる未經験
者よりも經驗者の方に反つて危険
が潜んでゐる事が思はれ、人智の
限度と嚴肅な自然の現實とを深く

自覺して置きたいものと思つた。

この事件の説明後當事者達は、この問題はこれで打ち切りにしてもらひたいと私に迫つた。私はそれに對して明答しないであつた。

この件は後で會の役員會で又問題になつた。遭難を扱ふ事は餘程慎重な態度を取らねばならぬといふ事、一般の雪崩遭難を論じてその例としてその問題を取扱ふのなからとなく少く其問題を主題として會報にのせる事は見合せられたといふような譯で、當事者にはしるべきでない事ではあるが、此際厳正に検討してその結果を發表する事は登山界に必要であると力説する人は一人もなかつたのである。そんな事情其他で此事件は結局それきりとなつてしまつた。

所がその後此遭難事件の當事者がその會の會報誌上で「會員の聲」の記事に關し、本會に對して抗議的中入れを行つて來たのであるがそれに對しては黙殺してしまつたのである。

私としては今頃この問題を蒸し返す氣持は毛頭持たないのであるが、當時「責任ある結末をつけたい考である」と編輯者として公言して置きたるにそれきりにしてしまふ事は如何にも心苦しく無責任な氣がしたので、後れ馳せ乍らも此處にその経過を説明して當時關心

を持たれた方々に對して責任の一半を果したいと思ふのである。

× ×

只此處で面白いのは此問題を境として「會員の聲」の寄稿がびつたりとなくなつた事である。私自身こそ「會員の聲」欄の爲に相當に手を焼いたとも言へるかも知れないが、多くの會員の方々はさうした経過を知つて居られる由もないのに、一向音沙汰がなくなつたのはどうした譯か。これは思ふに只「會員の聲」だけがなくなつたのではないので、折しもその頃、會の財政が苦しいのに會費の値上げも實行出來ず、經費節減の爲に十六頁の會報が忽ち八頁と半減になり、其上間もなくそれも隔月發行になるといふ消極方針を見て、會員諸氏も或は會報原稿を書く氣がしなくなつたものではないかと思はれる。其證據に原稿は益々減る一方だつたのである。先號の會報には編輯者がそのあとがきにその苦しい立場を訴へて居られる。此號だつて立派な原稿が澤山ありさへすれば私がこんなものを書かなくて済んだのである。

御承知のように先號から會報が再び元の二色刷に變つた。一色のひどく不體裁な會報も二回だけで御別れが出來たのは幸ひであつた。これであの不體裁なものよりは値段が相當に安いのだからあれはひどかつた。今度の二色刷をずつと續けられるのかと聞かれると、然りとは確答出來ない。續けられると引受けてもらつたので大いに喜んでやつてゐるのであるが、今の御時世だから先の事は何とも言へないのぢやないかと思はれる。それでは無方針でないかと言はれるのが甚だつらいのであるが、もし駄目になつたら矢張り戦争の爲だと諦めていたゞきたい。

會報も長く隔月が続いた。いやそれさへ後れ勝ちであつた。今月から毎月發行に歸ると言明してから既に半年餘りになる。心苦しい限りであつたが此號から初めて毎月發行に歸る事が出來たのである。七月號は七月中にお届けするようにした。若しそれを不可能とする事があつたならば、目下の所それは原稿不足以外には考へられない。會報が元氣を恢復したこの際にとにかくどしどし原稿を寄せていたゞきたいと思ふ。

あるが、そんな譯で紙が少ないうで會報の發行も出來ないのだからなどといふ事は決してないのであるから、安心して名論卓説をどしどし寄せていたゞきたいものである。

× ×

この會報用の用紙については、折悪しく會報の發行回数が少なく頁數も少ない頃の實績調査によつて日本出版文化協會から配給を受けたので、その量は當時（昭和十六年夏）の實際使用量の三分の一くらいに過ぎなかつた。其處で早速協會に交渉してもつと實狀に沿ふようにしてもらひたいと訴へたのであるが、當時協會では本會を理解出來なかつたものか、紙の量を増す所か一般と同様に段々と減るばかりで、何度特別配給を申請しても却下されるばかりであつた。會報の發行の不規則になつたのは一つにはこの影響もあつたのである。所が昨年秋季頃から漸く本會に對する理解を幾分深めたやうで、昨年末とこの三月の大削減で一般の雜誌が五割以下の紙の量しか配給されなくなつたのに對し、逆に會報用紙には二回の特配があつて今後毎月十二頁の會報を發行して十分賄ひ得る紙の量を配給されるやうになつた事は會員諸氏にも喜んでゐたといふ事と思ふ。半紙一枚満足に買へない時代であればこそこんな事も問題となるのであるが、そんな譯で紙が少ないうで會報の發行も出來ないのだからなどといふ事は決してないのであるから、安心して名論卓説をどしどし寄せていたゞきたいものである。

山 岳

第三十七年第二號内容豫告

- 一、山岳風景論 辻 莊一
- 一、山に省りみる 木暮理太郎
- 一、山鬼の習性 梅 棹 忠夫
- 一、飯豊山研究 二高山岳部
- 一、北葛澤再記 西岡 一雄
- 一、人力車上の觀山旅行 小島 烏水
- 一、ムスターグ・アータ 吉澤 一郎
- 一、變り行く富士の姿 塚本 繁松
- 一、其他 右の外尙數編の豫定稿があり、近く決定するであります。御期待を乞ふ次第であります。紙は矢張最上質紙を使用致します秋のうちに御届け出來るやうに努力致します。

×

×

會務報告

昭和十八年通常總會

日時 五月十四日午後六時

場所 藏前工業會館講堂

準備係 本署理太郎、横有恒、島

山梯成、木村鐵吉、角田

吉夫、塚本繁松

議事係 本署理太郎、横有恒、西

堀榮三郎、兼松學、交野

武一、角田吉夫、織内信

彦、塚本繁松

議長 會長本署理太郎

副會長横有恒

議事説明理事島山梯成

監事 木村鐵吉

書記 評議員角田吉夫、幹事織

内信彦

受付司會主事塚本繁松

國民儀禮ノ後開會、本署議長議

長席ニ着席開會ヲ宣ス

五月七日附會員總會通知狀發送

會員總數一千二百十六名

前日迄ニ意見具申者 ナシ

出席者 三十六名

委任出席者一千八百八十名

依テ定款第二十三條第三條ニヨ

ル出席者總數會員ノ三分ノ二以上

ニ達シタルヲ以テ此處ニ總會成立

ス

議長會務報告ニ入ル

會務報告(要旨)

元々私共ノ内部的要求ニヨツテ
發足シ多年ノ練磨ヲ得テ來タ登山
ハ、時局ノ進展ニヨリ今ヤ益々國
家の重要性ヲ帯ビテ來タ事ハ欣快
ニタヘナイ次第デ、時局ノ要望ニ
ヨツテ大日本體育會、大日本學徒
體育振興會等ガ結成サレタガ、本
會ハコレ等ト連絡ヲ提携シテ進シ
テ行キタイト思フ

本會モ多數ノ重要ナ人達ヲ前線
其他ニ送り出し、爲ニ事業ノ促進
ニ多大ノ支障困難ヲ來シテキルガ
ソレデモ既定ノ事業ヲ後レベセテ
進メテ居リ、登山年譜ノ編纂モ
沼井君其他ノ努力ニヨツテ相當ノ
進展ヲ見テ居リ、南方ノ山ノ研究
モ進メテ居ル

本年モソレ等ノ事業ノ外ニ山岳
年鑑ノ編纂其他ヲナス事ニナリ目
下案ヲ練ツテキル
本會々員ハ多年八百名内外デア
ツタガ一昨年初メテ一千名ヲ突
破シ、ソレガ昨五月十三日ノ現在
デハ一千二百十八名ニ達シテキル
本會發展上慶賀シテヨイ事ト思フ。
今後益々會員ノ増加ニ、會ノ事業
ノ支援ニ會員諸君ノ努力ヲ要望シ
テヤマス次第デアル。

次ニ定款第六條第一、二項改訂
ノ件ヲ附議
現在ノ本會々費ハ十數年前ノ改
訂ノモノデ、今ハ物價ノ騰貴等ニ
ヨツテ到底ソレニテハ財政ヲ賄ヒ

兼ナル狀態ニ致ツタ事ヲ説明、本
年度ヨリ
通常會費年額十圓
終身會費二百圓以上、但シ入會
後滿十年ヲ經過シタル會員ハ百五
十圓以上ト改訂シタク、ソレニツ
イテハ大體當局ノ内諾ヲ得アル旨
説明シテ終同ヲ求ム。

異議ヲ申立テル者ナシ
依テ可決決定ス
次ニ昭和十七年度歳入歳出決算
報告及昭和十八年度豫算案ヲ上提
ノ爲島山理事登壇

先ヅ決算報告ヲナシテ同意ヲ求
メ、次ニ可決サレタル會費ヲ以テ
計上シタル豫算案概略ヲ説明シテ
贊同ヲ求ム
右二案異議ナク可決決定
次ニ議長ヨリ補缺幹事四名推舉
ノ件ヲ提案、役員會ニテ推舉ニ決
シタ左記四名ヲ列示ス
田邊主計、小野幸、谷口現吉、
杉本義信

尙新任幹事ハ全部補缺ナルモ、
前任幹事ノ殘任期ヲ就任スルノデ
ナク、前年ノ役員會ノ取決メニヨ
リ任期ハ三年ノ旨説明
右異議ナク可決決定
カクテ提案ノ議事全部可決終了
ニ付議長閉會ヲ宣ス

總會當日は折悪しく警戒警報發
令中であつた爲、出席不能の會員
もさぞかし多かつた事であらうと
残念であつた。總會は全國の會員
に通知狀を發してあるものであり、
警戒管制だからといつて中止して
やり直すといふ事は事實上不可能
に近い事なので実行したが、萬一
出席者が餘り少ない場合は講演會
だけは延期する外はあるまいと思
はれた。もし空襲警報が出たら？
それは無論論議會、延期はやむを得
なかつたであらう。

さて當日となつて、事務所へ有
無を電話で問合せる人も十名以上
もあつたし、出席者は講演會の分
と合せて六十名以上にも達し、こ
の分なら講演會も行ふ事となつ
た。當日は警報下の爲出席者の大
多數は防空服にゲートル姿であり、
又少佐から少尉迄の軍服姿の會員
が四名もあつた事は時局色を濃厚
に示して居り本會の集會としては
前例のない事であつたらう。燈火
管制の爲窓を全部締切つたので、
時節外れの高温の上一層むし暑か
つたが、その代り外部の騒音が殆
んど聞えず靜肅に會を進める事が
出来た。(塚本記)

出席者
本署理太郎、島山梯成、瀬戸強
三郎、田中常介、山口京一、名須
川渡、神谷恭、横有恒、角田吉夫
吉田竹志、織内信彦、油井寅太郎
法政大學山岳部、慶應義塾山岳部

船越好文、飯塚篤之助、金山淳二
林和夫、谷口現吉、木村鐵吉、鈴
木八十吉、早川義郎、谷重雄、大
熊保夫、青木正雄、松田一郎、田
中管雄、堀田彌一、藍田努、安藤
武、内山均、上田勇五、山縣登、
太田敬、増永次夫、塚本繁松

講演會

雪洞に就て

慶應義塾山岳部
講演會は會員總會に引續き七時
過より慶應義塾山岳部員加藤喜一
郎氏によつて行はれた。

加藤氏は先づ時局下に於ける學
生の登山に對する態度、登山岳部
の毅然たる方針について信念を吐
露し、現在與へられた任務を遂行
しつゝやがて召されたる日は先輩
の後を追つて國防の第一線に立つ
覺悟の程を示し、全出席者に心強
い信頼感と感銘を與へた。

次いで慶應山岳部の雪洞研究の
歴史、經過を述べ、八年間の經驗
によつて歸納された、雪洞の形、
大きさ、斜面の角度、雪洞の位置
と雪崩との關係、時季、雪質等に
よる耐久性の限度、實川の限度、
換氣の問題、湿度の問題、防水の
問題、外被の問題等につき、實物
寫眞、圖解等によつて詳しく説明
され、雪洞は尙研究途上にある事
も附加され、最後に再び時局に對

する覺悟を述べて降壇、質問に答へて九時過終了した。

尙この雪洞の研究については改めて「山岳」に掲載する事に御願ひしてあるので詳細は略する事とし、當日出席されなかつた全國の會員諸氏に其發表の日を待つていたゞく事とした。

尙この講演會を警戒警報下に行つた事については講演者並に會員諸氏に深く御詫びする次第である。(塚本生)

會員外講演會出席者三十四名

會員 笠原新二氏

會員笠原新二氏(昭和十六年十二月入會會員番號二一〇七番)は飯山營林署長として精勵中病を得られ、新潟醫科大學附屬病院にて治療に努められたが遂ひに藥石効を奏せず五月六日午前三時逝去された。享年三十五歳。

本會は有爲なる會員を失ひたる事を惜み深く哀悼の意を表するものである。

會報原稿募集

- △締切 毎月二十日
- △用紙 十五字詰のこと
- △長さ 隨意なれ共餘り長いものは會報には不向・但し分載出来るものなら差支へなし
- △右御諒承の上續々御寄稿乞ふ

會員消息

兼松 學氏(大東亞省調査官)

四月來滿洲北支中支に出張中の所
五月中旬歸來

織田 明氏 召集解除となり從
前通り東大産婦人科に勤務

石黒清藏氏(富山市) 命により

某方面に出向

茨木猪之吉氏 五月中旬より東

北島海山方面に寫生旅行

恒吉忠康氏(日本映畫社員) 現

地軍の委嘱によりボルネオの最高

峯キナバル山映畫化の爲最近出發

の豫定

森 喬氏(特命全權公使) 今般

ハンガリー駐劄を命ぜられ近く赴

任さる

山日記の出來日

山日記の正確な出來日を今
お知らせ出來れば好都合なの
ですが、連日三省堂と連絡を
とつてゐますが未だ決定を見
るに到りません。餘り長びく
ようですといづれ注文の方々
へ直接御挨拶申し上げます。

山岳の出來日

七月と思はれるに到りまし
た。御待ち下さい。

山岳

第三十七年第一號

再び冠帽峯へ

雪崩の描寫

ラウンド・カンチエンチュンガ抄譯

登山再編成論

飯豊山 頼母木川溯行記

船形山 横川溯行記

伊豆遠笠山

寶川源流を降る

追悼記

丸山晚霞氏の追憶

佐野和男君の事

定款及細則

A5判約三百頁 口繪十數葉

最上質紙金王五十斤使用

定價 三圓 税金相當額

計 三圓二十錢 送料二十錢

少數部數一般頒布

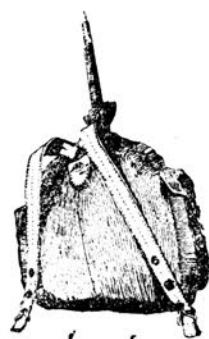
發行所

社団法人

日本山岳會

キスリンク型(E式)

ルツクザツク



御手元にある布地御持參になれば
御調製申上げます

山とスキー具専門

東都最古の専門店

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話 九段(33) 三二一〇番
振替口座東京九一一八四番

店主 片桐盛之助

